

等にいつ乗船の順番がまわってくるのか、それまで怪我や病氣しないように頑張り抜いて欲しい、と心のなかで祈っていた。

チチハルの弾薬庫に収容されていた時黄疸にたおれ、中隊の古参兵や同年兵と行動をとるにできない不安と焦慮はあったが、かえってそれが幸いであったかも知れない。古参兵と初年兵のきずなは、捕虜になってもかわらなかつたのではないか、おそらく軍隊の延長ではなかつたか、私は他隊の兵隊と年次を考えない対等のつきあいができたのである。

四、復員して

復員して我を取り戻してからも寒気と飢えに打ちひしがれ、ソ連兵に追われている夢をいくどもみたことか。ようやく落ち着いたころ、東京のGHQから英文の呼び出し状とその翻訳文をいれた厚生省からの出頭要請がとどいた。要は米軍の情報入手活動に協力させるためであったが、真実、私は提供するだけの知識を持っていなかった。それでも四日間釘づけにされたのである。

六十三年四月、舞鶴に引揚記念館が竣工した。私はひ

かれるものを感じて、一日、妻と記念館を訪ねてみた。比較的若い見学者が多いように思ったが、彼等の表情にはなんの感慨もないようにみえた。私は陳列されている品々をみて胸が詰まったが、これを持って生還できた人は真実幸運であつたと思つた。

戦争体験の記

滋賀県 西尾 亀 三

昭和十四年二月、私は現役兵として濱江省巴彦にあつた満州第七七五部隊第一中隊軽機班に入隊した。

二月二十日、大阪に集合、迎えに来た部隊からの将校、中隊からの下士官のいんそつにより大阪港から大連に上陸、ハルピンを通過、巴彦に着いた。夜になると零下十度を越え、出入口開閉戸の金具をにぎると手からはなれないことが今も頭のなかにある。

三か月の初年兵教育のおわらぬ昭和十四年六月、ノモンハンでソ連の攻撃が始まった。大型戦車を先頭に機械

力による攻撃である。わが第一中隊はハルピンへの出動命令を受けて出発した。先輩の三年兵は第一線ノモンハンへ向かった。少数の二年兵と一部の初年兵で巴彥留守隊の警備についた。

ハルピンの中隊本部への連絡は、松花江を走る連絡船の利用である。巴彥とハルピン間は武装しているが言葉の通じない一般人と共に往復したときのことは今でも忘れることが出来ない。

第一線に出て、ソ連戦車に体あたりして帰隊することのなかった三年兵殿の冥福をお祈りしている。多くの犠牲を出したが、強力なわが軍の反撃により、ソ連軍は短期で引き揚げた。

ソ連国境が重要となり関東軍の精銳が北進した。わが第七七五部隊は三江省黒龍江の治安を守る任務を受け、第一中隊は最前線の同江（松花江と黒龍江の合流点）の守備についた。分遣が多く、街津口・將校以下二十人、三江口・兵五人（満人農民服で）満州警察隊と同居、二龍山・將校、兵五人等で、中隊本部への連絡は単身でマーチヨ（住民の馬車）または乗馬である。

冬期の夜は零下十五度から二十度になる。絶えず動いていなければ凍傷になる。黒龍江（五百メートル）の向いはソ連領で凍結して陸続きと同様である。緊張のうちに三年が経過した。

再役しない我々は除隊、内地帰りとなった。

多くの同年兵が再役し、下士官になり、現地守備を続けたが、昭和二十年八月九日、ソ連軍が満州国内へ侵攻した。戦友たちは富錦陣地を中心に強固な反撃をして戦ったが、三百人を越える犠牲者をだした。最後の一人まで戦う決意であったが、日本人の一般人も護らなければならぬため上部からの命令により南下した。生き残った戦友は捕虜としてソ連に連行され、二年、三年と苦しい労苦を重ねた。長い者はさらに中国に送られ七年または八年後に帰国した。私は台湾で終戦を迎えた。

私は昭和十七年五月除隊、三重県に帰り、軍需工場のほかに働くところはなく、職業指導所でいわれるままに三重県四日市市第二海軍燃料廠に入廠した。

精製部の原動缶（日立ヤーロー式）三基のフル運転、八人一組で二十四時間を二交替、百屯の石炭を使用する

日もあり、投入口が遠くなるとパイスケ（竹ザル紐付）二個を肩に三十キロをにない板橋のうえを繰り返し走る。戦いに勝つためと思えばこそ出来たのだろう。

翌十八年九月、台湾第六海軍燃料廠に転勤の指示を受け、単身出発。名古屋駅から海軍の証明により佐世保に向かう。岡山通過のころから空襲となる。暗闇の佐世保に着き、防空壕で一夜を明かす。翌日海兵団に集合するも出発期日は未定とのこと。佐世保港入口近くまでアメリカ軍の潜水艦が来ているとも耳にはいる。一週間後、緊急集合で船団を組み台湾に向い出港した。

乗船した浅間丸が主力のようであった。時々甲板から爆雷を投下しながら走った。目的の高雄を基隆に変更して上陸した。鉄道により高雄の第六海軍燃料廠に着く。建設途上にて生産に達しているところはなかった。精製部で内地人三人と台湾の青年二十人余での作業である。原油はなくアルコール燃料化等が主であった。昭和十九年になりアメリカ軍の攻撃が始まった。

台湾沖海戦では敵艦載機が低空をとびまわり撃つ弾丸が擬装の丸竹にあたりパチパチと音を立てる。一目散に

防空壕に飛び込む。いつまで命があるかと思えば寒気がした。それに引きつづき上空から米軍重爆撃機B25が大編隊で悠悠と飛来して上空手前で投下する。シュルシュル引き続く音が防空壕のなかに聞こえ、その後大きな爆発音がする。最初の空襲では考える余地もなくあせんとしていたが、度重なる空襲で敵機の行動をみて危険を知ることが出来た。重爆撃機B29高度八千メートルと聞くが、わが海軍地上部隊の対空射撃力は高度六千メートル以下と聞き心淋しい思いをした。昭和二十年の春を越えると台湾上空を敵機は飛ぶが襲撃はなくなり通過のみであった。悪いニュースのみが耳の入り、作業の進展もなく、施設をみまわっている毎日がつづいた。

八月十五日終戦となる。台湾人は皆施設をはなれ、第六海軍燃料廠は閉鎖される。内地人は施設内部に集結し指示を待つ。二十一年五月海軍軍人と共に、少々の小物を手に内地送還となり、大竹港に上陸、現金一千元を受け取り郷里の兄の家に着く。

昭和二十一年五月の帰国であるが、元満州関東軍での戦友の生存者を探し合い、年に一度の四十人あまりの会

合をおこない、戦没者と物故者の冥福を祈りつづけていく。

ソ満国境警備体験記

山梨県 末木定弘

昭和十五年一月十日現役兵として東京都世田谷野砲兵東部十三部隊に入隊した。翌日から注射の毎日である。二四時間安静の四種混合注射を受けた。一月十八日外地派遣のため、品川駅を出発（行先不明）。途中、静岡市の大火の残煙を車窓よりみる。

下関―門司（一泊）、釜山―満鉄と進み、一月二十三日頃満州国黒河省孫吳到着。ここでほとんどの同年兵が下車した。満州第五一四部隊本隊の所在地であった。

同年兵と分かれ、我々は長い時間列車に缶づめにされ、さらに北の黒河省黒河駅で下車した。夜半である。はじめて大陸のきびしい寒さに接し身ぶるいした。

迎えのトラックに便乗、回国最北端の法別拉陣地（環

環県）に到着した。一月二十四日未明、一行百五十人ぐらいたったと思う、バラックのような木造兵舎にはいり二、三年兵を迎えられた。夜明けと共にあたりは一面銀世界の山岳地帯となった。点々と淋しく白樺の木がある。

満州第五百十四部隊派遣法別拉陣地第二中隊斎藤隊であった。

各班に配属され一日はゆっくり休むことが出来たが、翌日からはきびしい軍隊生活が始まった。観測、通信、砲手、馭者と配分され、小生は通信であった。

日ならずして二、三年兵の怒号が各班でおきた。気がゆるんでいるというビンタの私的制裁である。

二年兵の戦友を一人受け持ち先輩のすべての面倒をみた。順番のことで初年兵の役目であった。枕等よごれていると金魚の絵と水がほしいと赤いチョークで書かれ、洗濯せよとの意味であった。百メートルもはなれたくぼ地の水のたまりで氷を割っての洗濯、そとは零下三十度の寒さ、耳も手もちぎれる寒さであった。

通信兵として毎日教育を受け、手旗信号から観測野砲